ここに生きる

独立行政法人国立文化財機構理事
奈良文化財研究所長

松村 恵司さん

〝歴史〟を掘る充実感

1969年、明治大学文学部史学地理学科考古学専攻入学。テレビで東大安田講堂の攻防戦を見ながらの受験勉強。この年は東大の入試が中止となり、同学年の東大生はいない。大学紛争最盛期の明治大学は、4月末に学生側のバリケード封鎖とそれに続く大学側のロックアウト。いやはや大変な年の入学であった。同級生とバリケードの中で口角泡を飛ばした議論。考古学とは何か、そして歴史学、学問とは……。その時に読んだ本や考えたこと、激論の数々が今でも大切な財産となっている。

11月に大学が再開するも、紛争の影響で遺跡発掘の考古学実習がなくなり、各地で活躍する先輩を頼って千葉、神奈川の発掘調査現場へ。OBはみな面倒見がよく、発掘調査や測量の技術、遺構と遺物の実測方法、トレース、そしてお酒の飲み方を教えてくれた。大学の伝統は、大学外でもOBから後輩へと連綿と受け継がれていくようだ。

考古学に興味をもったのは小学3年生の時のこと。転居先の横浜の畑に落ちている縄文土器を夢中で拾い集めた。早熟な考古学ボーイは、大学の先生方にとっては、さぞ扱いにくい学生だったにちがいない。結局、学部5年、大学院3年の計8年間、和泉・駿河台で学生生活を過ごした。今でも学生時代が一番だと思う。当時の考古学研究室は小川町校舎の考古学陳列館の中にあり、時間があると研究室へ、そして神保町の古書店街へもよく通った。伝統ある明治大学考古学専攻で学んだ考古学史と考古学方法論、この2つが揺るぎない基礎となって、これまでの研究生活

Keiji Matsumura

専門：歴史考古学、古代国家成立期の考古学的研究。2000年に飛鳥池工房遺跡で最古の鋳造貨幣、富本銭を発見。2006年～07年にかけて、高松塚古墳壁画の保存に向けた石室解体事業の発掘調査を担当

1950年7月2日	山梨県甲府市に生まれる
1969年	明治大学文学部史学地理学科考古学専攻入学
1977年	明治大学大学院 文学研究科 修士課程修了
同　年	奈良国立文化財研究所入所
1987年～1995年	文化庁記念物課 文化財調査官
1995年4月	奈良国立文化財研究所 飛鳥藤原宮跡発掘調査部 考古第二調査室長
2001年4月	独立行政法人 文化財研究所 奈良文化財研究所 飛鳥藤原宮跡発掘調査部 考古第二調査室長
2007年4月	独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所 都城発掘 調査部 考古第一研究室長
2007年～08年	京都大学大学院人間環境学科 客員教授(兼任)
2008年4月	独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所 都城発掘調査部長
2009年～2010年	文化庁 文化財鑑査官
2011年3月	文化庁定年退職
2011年4月	奈良文化財研究所 客員研究員 帝塚山大学大学院 非常勤講師
2011年10月（現在に至る）	独立行政法人国立文化財機構理事・奈良文化財研究所所長

論文：「古代集落と鉄器所有」『日本村落史講座』第4巻、雄山閣出版、「古代集落と在地社会」『土地と在地の世界をさぐる』山川出版、「古代の村の暮らし」講談社、「富本七曜銭の再検討」『出土銭貨』第11号、出土銭貨研究会、「富本銭の製作工程と鋳造技術」『ものづくりの考古学』東京美術、「無文銀銭と和同銀銭」『出土銭貨』第9号、「古代銭貨の銭文」『文字と古代日本4』吉川弘文館、「藤原京の碁石」、「飛鳥池工房のガラス」(明日香風)、「出土銭貨」『日本の美術』第512号ほか多数

It Lives Here, Keiji Matsumura

を支えている。

就職先は奈良の国立文化財研究所、通称「奈文研」。親元を離れての初めての関西での1人住まい。関西のしきたり、慣習の違いに戸惑うこともしばしば。関西弁を話せないと発掘現場の作業員との意思の疎通がはかれない。無理に真似ても微妙なイントネーションまでは真似できず、中途半端な関西弁が今も続く。

奈良は古代律令国家誕生の地。「やまとは国のまほろば　たたなずく青垣山こもれる…」山々が幾重にもとり囲む緑豊かな奈良盆地は、文化財と遺跡の宝庫。『日本書紀』や『続日本紀』に登場する寺跡や宮跡の発掘は、何事にも代えがたい喜び。〝歴史〟を掘る充実感に、盆地特有の厳寒、酷暑の発掘もさほど苦にならなかった。発掘された遺構や遺物は歴史の証人。寡黙な彼らに如何に歴史を語らせるか。それが研究者の腕の見せ所。

藤原京、平城京をはじめ、蘇我倉山田石川麻呂が建てた山田寺、天皇の大寺「百済大寺」「大官大寺」、渡来人の寺「檜隈寺（ひのくまでら）」「坂田寺」、長屋王邸、高松塚古墳など、数多くの著名な遺跡の発掘に従事することができた。とりわけ飛鳥池遺跡の富本銭の発掘は、歴史を書き換える貴重な体験。考古学の可能性がさらに大きく広がった。

小学生時代からの夢が実現し、考古学が生涯の仕事になった幸運に感謝しつつ、ワクワクドキドキの興味が尽きない考古学の楽しさを、これからも社会に伝えていきたいと思う。

復原された平城宮第一次大極殿

平城宮資料館の瓦展示

飛鳥遺跡出土の富本銭

奈文研の表札